『どうけ』

メイクを落としながら
道化は己を見る
素顔が鏡に映る
手の動きが止まった

お前は何者だ！

鏡の素顔が問いかける
道化は目を瞑り
それから息を吐き
深く息を吸い込んだ

お前は何者だ！

目を開いた道化は
所々メイクが残っている
自分の顔を睨んだ
奥底へと吸い込んだ物を
ゆっくりと吐き出した

訪れた幾つもの町々
過ぎ去った幾多の憧憬
道化の瞳に浮かんでは
消えていった

メイクとともに落としては
消えて行った
素顔になった自分が
道化の自分を睨んでいる

『たびびと』

氷雨混じりの日でした
トランクを持った男が一人
野原に張ったテントへと
入ってきました
ローソクの灯りに照らされながら
幾多の町を旅した人の悲しみを
凍えながら戯け演じました
幾多の町を旅した人々の涙を
凍えながら戯れ演じました

メイクの顔と縦縞の衣装が
観客の目を楽しませるべく
笑いを誘い そうなのです
……
道化の笑顔は
観客の楽しい笑いでなく
道化の笑いは　哀しみ憂いと
いつしか 様変わりしている
道化というより人間として

『さーかす』

町にサーカスがやってきました
象やライオンや
美しい女の人もおりました
でも 私の好きなのは
あの道化のおじさんでした
知らない町の話しをしてくれました
きまって最後に言ったのは
お母さんがお家で心配しているよ

月日が過ぎた雨の日
小さな町でおじさんに出会いました
ひとり旅の中で

道化のおじさんに巡り会いました
顔に化粧して
長い積もる話しとコーヒーを飲みました

町にサーカスがやってきました
象やライオンや
美しい女の人もおりました
でも私の好きな
あのおじさんはいませんでした
私が覚えている
おじさんと言えば
いつも淋しい笑顔でした

『どうけ二』

ラッタッタッタッタ
ラッタッタ
おいらは道化師
笑い売り
楽しい楽しい笑い売り
お一ついかが
お二ついかが
楽しい楽しい笑い売り

ラッタッタッタッタ
ラッタッタ

恋心に悩む娘さん
さあさあ占いましょう
貴方の恋の成就を
どこの野原にもある
四葉のクロバー
さあ自分の胸に手を当てて
私はあの人を愛しています
と言うのです

ラッタッタッタッタ
ラッタッタ

一緒になれないって
今度は一緒になれるって
葉を千切るのです
また一緒になれないと千切って
最後の一葉が残りました
さあ言う言葉は一つです
一緒になれる

ラッタッタッタッタ
ラッタッタ
おいらは道化
笑い売り
楽しい楽しい笑い売り
お一ついかが
お二ついかが
楽しい楽しい笑い売り

『さーかす二』

千の心が笑っていた
一つの心の道化へ
千の言葉が一つになって
一つの心が
千の言葉になって
テントは笑いの渦で揺れた

空中ブランコの生活だった
綱渡りの生活だった
老人は自分の人生を振り返り
若者たちは
空中ブランコのスリルに興奮し
綱渡りの緊張に感動し

自分の人生を生きようとしている

テントの中は
千の笑いが渦巻いていた
千人の心が一つになり
道化の一つの心が
千の言葉となって
人生の善き日を瞳に浮べていた

『たびびと二』

ツンクルトンクルツンクルトン
わたしゃ 気軽な旅人よ
腹が減ったら野苺食べて
水を呑みたきゃ谷の水
寝るときゃ満天星々だらけ

ツンクルトンクルツンクルトン
わたしゃ 呑気な旅人よ
犬が吠えりゃ
がきん子の石粒て
そこで おいらは叫ぶのだ

この村よ湖になれ村人よ魚になれ

ツンクルトンクルツンクルトン
やがて四季おりおりに
詩人が訪れては
湖に舟を走らせ詩を唄い
魚を捕っては食べました

ツンクルトンクルツンクルトン
わたしゃ 春の旅人 道化師
ツンクルトンクルツンクルトン
わたしゃ 夏の旅人 道化師
ツンクルトンクルツンクルトン

わたしゃ 秋の旅人 道化師
ツンクルトンクルツンクルトン
わたしゃ 冬の旅人 道化師
ツンクルトンクルツンクルトン
ツンクルトンクルツンクルトン

『のみち』

月に照された野道へ
道化師が現われて
たった一人歩いている
深夜の野道を
戯けながら未来へと
旅人は歩いている
淋しさを舞って
悲しみを舞って
月の明かりに
戯けの舞は照されて
深夜の闇を背景に
道化師は未来へと
夢を追い続けて歩いている
月夜の野道を
煌めいている星を観客に
旅人は舞戯け
明日へと歩いている

『どうけ三』

コチ・コチ・コチ・コチ
巻き忘れた時計が
何かに揺れて
動き出した
おーい、誰か居るのか？
道化師は耳を澄ました

風の吹く音がし
暗幕が揺れ
コチ・コチ・コチ・コチ・
始めはゆっくりと
すぐに早く
それから針が止まってしまう
……
道化師は眠りの中で
夢を見ていた
延々と続いている道の上で
独り立っている

『たびびと 三』

暗い窓に煙草の煙が
ビロードのように広がり
車内へと消えている
その向こうに樹々を田畑を
山も川も野原も町をも隠した
暗黒の闇が
次から次と後ろ去って行く
客のまばらな中で
無性に寂しい時間は
刻々と過ぎ行き
スチームの暖かさに
やり切れなくなる
人生の苦酷を耐えてきた
旅人の老いた顔が
単調なリズムの中で
じっ〜と目を閉じている

『どうけ 四』

すべては矢のようにすぎ
時は帰らず
いにしえの出来事が
溢れるように心に満ち
道化師は捕ろうと手を延ばす
老いた父母へと
昔の日々が涙に走り
一人黙祷す
千の心の笑い響き声で
道化師は我に戻り
戻らぬ日々を一人舞う
笑いと陽気の観客が渦の中で
道化師は一心に
戯けに戯けを舞っている
矢のように過ぎて行く
時を捕まえようと
過ぎ行く時を捕まえようと

『どうけ 五』

音もなく
音もなく
心に寂しさが訪れ
千の笑いへと溶かす
瞳には笑みを見せて
心へ忍び寄る寂しさを
千の観客の寂しさを
道化師は一心に聞き取り
千の観客へと
道化師は泣きながら
笑みを浮べて戯け舞う
千の笑い声に安堵し
生きだけを頼りに
道化師は戯け舞う
音もなく
音もなく
道化師は戯け舞う

『さーかす 三』

町の広場のテント小屋
小雨に煙りしとしとと
静かに静かに打たれてる
背中に聞こえる笑い声

背中に沁み込む憩い渦
喜びも悲しみも
道化の瞳に映っている
寂しさも苦しさも
その目の底に沈んでいる
子供の頃の寂しさが
道化の瞳に燃えだして
舞に舞う戯け道化の命舞
心で泣いて舞に舞う
雨に打たれる暗幕の中で
千の心よ憩いよとばかり
道化師は舞に舞う戯け舞
町の広場のテント小屋
雨に打たれて佇んで
千の笑いの渦巻きを
雨が静かに聴いている
雨が静かに聴いている

『きょうぞう』

鏡の中の像が私を睨んでいる
お前は誰なのだ
何処から来て 何処へ去るのだ!
白く塗ったお前の顔
赤く染めたお前の鼻
大きく縁取ったお前の瞳
緑・赤・青・黄
紫・白・茶・紺
縦縞文様の衣装
色とりどりの衣装を着た
メイクの顔が私を睨んでいる
暗幕の外は月が照り
星たちがきらきらと瞬いて
深閑の闇が下りている
晴れの日々を
雨の日々を
風の狂吠えする日々を
雪の日々も
縦縞衣装を着たメイクの顔が
身動ぎもせず
暗幕の裸電球の下で
私をじっと自問している

『こころ』

みやげを選ぶ
吾が心平和なり
静かなり
あの人にも
この人にも
思い浮かぶ
吾が心平和なり
静かなり
みやげを選ぶ
吾が心楽しきなり
平和なり
あの人にも
この人にも
思い浮かぶ
吾が心平和なり
静かなり

『天幕時計』

時計が一つ
ポール時計が一つ
静かな時間を照らしている
誰もいない天幕の内に

音すらも吸い込まれ
誰もいない天幕の中は
息のみが波打っている

雨が冷たく
天幕ををうち
土道をうち

雪が静かに
下界を変えている
変えている

止まった時計の向こうで
止まった時計の向こうで
時はすぎ
時はすぎ
雪の下えと音もなく
横たわって行く
横たわって行く

止まった時計の向こうで
時はすぎ

時はすぎ
雨の中えと涙が
霧雨の中へと涙が
流れ行く
流れ行く

ポール時計が一つ
ポール時計が一つ
静かに空間を照らしている
天幕の奥深くへ
音をも吸いこんで
寂しさのみが
波打っている

『こころ二』

くるくる風車がまわる
祭り日に風車がまわる
くるくる風に吹かれて
まわる まわる まわる
くるくる風車がまわるまわる

くるくる風車がまわる
くるくる風車はまわる
くるくる風に吹かれて
幼い日がまわるまわる
くるくる風車がまわるまわる

くるくる風車がまわる
祭り日に風車はまわる
くるくる風に吹かれて
思い出がまわるまわる
くるくる風車がまわるまわる

『こころ三』

小雨に煙る
家並は
夕暮れ日暮れて
夕げ時
一人傘さし
通る路
背中に聞こえる
笑い声
背中に染み込む
夕げ唄

長靴はいて
傘さして
通った道が
現れる
四十五過ぎて
現れる
この目の底に
映り出す
子供の頃の
淋しさが
今になって
泣けてくる
今になって
泣いている

急ぎ足
何やら忙し
店並を
肩がぶつかり
急ぎ足
道行く人の
帰宅足

……
あれはたしかに
十五頃
……
裸電球が
照してる
戻らぬ日々を
照らしてる
帰らぬ思い
照らしてる

『街景』

夕暮れ時の
街並は
うすもや色に
染められて
道行く人の
無言足
道行く人の
帰宅足
道行く人の

路地裏小路の
店先の
裸電球が
照らしてる
遠い昔を
ほんのりと
あれはたしかに
六っ頃
母さん路地で
煙りだし
秋刀魚焼した
七輪に
赤い炭火が
あったっけ
あれはたしかに
十二頃
拳骨くれた
父さんの

うすもや色に
染められた
夕暮れ時の
街角は
道行く人の
帰宅足
道行く人の
無言足
せわし行き交う
副小路地を
裸電球が
照してる
店の明りが
ほんのりと
道行く人を

照してる
夕暮れ時の
街角を
道行く人の
無言足
道行く人の
帰宅足
道行く人の
急ぎ足

『観客』

流す涙は熱いでしょうに
とめどもなく溢れ
止まりようもないのですね
そうですよね
生きている証ですよね
本当にね
口ではだせない
言わずの語り
無垢のように真白で
あなたまかせに
この世を信じて
……
流れ出る汨は熱いでしょうに
止まりようもなく

頬をつたわり
本当に……
……人間って人生って
どうして……こうも
素晴らしいのでしょう

『きちがい』

何時か自分は
狂人になりたいと思った
ただ真実だけを
掴みたかったから
一つ一つ
人間になりながら
一つ一つ
孤独になっていく
一つ一つ
笑いながら
一つ一つ
涙を流している
狂人になれなかった
自分は
ひとノミひとノミ
人間の型に彫られ
いつしか五十年
彫られている

狂人になれなかった
自分は
一日一日と
人間に造られ
いつしか五十年になる
一秒一秒
人間の血肉を
植えられながら
一秒一秒
真実が霞んでいく
一つ一つ
人間となるたび
一つ一つ
真実が見えなくなる
産れた時
あれは何の為の
泣き声だったのか
産れた時
あれは何の為の
泣き声だったのか

『こころ 四』

狂になるほど
……
音のない場所で

風景を風情を
ただ、ぼやっと
眺めていたい
……
……
海は寂しいから
山は悲しいから
人のある風景を
そうやって一日中
見ていたい
……
……
それが私の人生
そうやって死ぬまで
行けたらと思う
……
……
そうやって死ぬまで
行けたらと思う
それが私の人生

『愛』

ローソクの炎が
壁にゆれ
仏の愛が

昔から未来へと
悲哀の母子を
照らし継いでいる
照らし続けている
……
……
……
思わず差し出した
両手へ
ローソクの灯炎が
熱く伝わり
この手も
この心も
まだ生きている

End all [*Clown and Traveler*]